『英語にとって「評価」とは何か？』を読んで
第２部“「量」の指導と「量」の評価”より

寺田義弘（茨城・高校）

【引用①】
スピーチの授業が面白くないのは聞き手にスピーチの内容が分からないことである。従来のスピーチの授業が失敗してきたのはこのためである。ではなぜ、聞き手にスピーチの内容が分からないのであろうか。それには２つの要因がある。ひとつは原稿の棒読み・丸暗記であり、もうひとつは発表者の話題が全くバラバラで発表者まかせであったことである。（Ｐ１０５）
【理由①】
昨年度１学年を対象にディベートの授業を実施することとなった。（県からディベート推進校に指定を受けていたため。）最初に Constructive speech をまず肯定側が読み上げるのだが、この生徒の英語の聞き取りが非常に難しい。英文自体は ALT にチェックを受けてあるので通じる英語のはずだが、日本語のリズムで棒読みとなってしまい、余計な子音もたくさん混ざるし、なんといっても声が小さく意味が良く分からないのである。だから、これに続く質問の時間は、相手の言っていることの確認だけとなり、当然「証拠はあるのか」のようなレベルの質問に行くのが難しいものとなる。先進校視察で行った広島の高校（ディベートも有名）でもディベートでのこの聞き取りが一番の悩みどころで、授業では事前に原稿を相手チームに渡してしまうこともあると聞いた。実際ディベートの県大会の決勝レベルを見たことがあるが、私自身全くついていけないスピードで機関銃のように原稿を読み上げるのである。ディベートではそれが当たり前のようで、コミュニケーションとは程遠い感じが私にはどうしてもしてしまう。寺島先生の上記の言葉から、いっそのこと原稿読み上げは禁止の方が授業でディベートをやる場合は良いのかもしれないと思った。メモを使っての Constructive speech は名案かもしれない。

ディベートに関してもう少し触れておくと、現任校ではやることが前提だったので、ディベートについての賛否はあっても、１年間とりあえずやってみての感想は、寺島先生にはきっと怒られてしまうかもしれないが、「思っていたよりは悪くなかった」である。今年は肯定サイドだけに絞って立論を書いて、それに対する反駁の練習に絞って行なった。例えば「携帯電話は中学生は所有禁止」というものに対しての立論を、自分はそのことに反対だとしても、賛成側として意見を考えるたりするのだが、相手を説得するための論理的な文章を書く練習になったし、ミニディベートなどはある意味「お遊び」なので「先生役」と「生徒役」の劇のつもりで取り組んでも、何か生徒の人格形成に有害な技術を教えているという感覚は起きなかった。週に１回程度、授業の最初は１分間スピーチとかもやっていたので、会話の練習くらいの感覚しか生徒たちもなかったと思える。

【引用②】

結論から先に言うと、専門教育としての英語ではなく、中学や高校および大学における一般教育としての英語であるかぎり、基本的には「量による評価」だけでよいというのが私の意見である。（Ｐ１１７）・・・（中略）・・・「量による評価」によって学習意欲が引き出されたら、それで教師の基本的任務は終わったのである。（Ｐ１１８）

【理由②】

残念なことに現任校では「量による評価」と聞くと大量の「課題」「宿題」が連想してしまう。現任校では部活との両立だけでなく、塾との両立も難しいと良く言われる。なぜなら、毎日やらないととても終わらない量の宿題・課題が出るからである。週明けに毎週出さないといけない課題、定期テストごとに出さなくてはいけない課題、小テストの勉強。自分でやりたい勉強をする時間はほとんど残っていないはずである。それでも教師は課題を出さない生徒は放課後残したりして、無理矢理にでも課題をやらせる。答えを写して提出する生徒も少なくない。課題を出さない生徒は平常点から減点されていく。残念なことに、ここでは確かに「量による評価」は存在するが、学習意欲を引き出しているとは言い難い。それでも教師は「出さないと益々勉強しない」と思っているので課題をさらに出すという悪循環を永遠に繰り返すことになっている。確かに本校の生徒は進学校なのに課題がないと本当に勉強しない。私の母校でもあるので良くわかる。私も３年になるまで全くしなかった。現任校に赴任してから４年、今年で５年になるが学習意欲を引き出す宿題・課題の出し方とはどんなものがあるか日々頭を悩ませている。

【引用③】

質を評価される限り希望を持つことは難しい。しかし「量」で評価されれば希望が持てるのである。なぜなら「量」は自分の頑張りだけで到達可能だが、「質」はそうはいかないからである。（Ｐ１２０）

【理由③】

「生徒に希望を持たせる評価」、新規採用の時から前任校までは評価基準を生徒に公開するという「ガラス張り評価」をプリントにして授業開きで配った。これにより生徒は「見通し」を持って授業の諸活動に積極的に取り組んでくれていたように思う。提出物１つに１点とか明確に宣言していた。つまり私の方も年度初めに、どれくらいの課題を出すか大体分かっていたということである。ある意味私自身もこのガラス張り評価を作ることで見通しをもって授業のデザインを行うことができていたのだと思う。残念ながら現任校ではこの「ガラス張り評価」は行っていない。

　と、ここまで書いてきて、２番目の引用の「理由」部分に自分で書いた事に対する答えが出てしまったような気がする。つまり課題を出している私たち教師の側に「見通し」がないこと、生徒も「見通し」をもって課題をやっていないので「やらされている感じ」しかしないことが原因である可能性がある。学習意欲を引き出すことはやはり「見通し」な

のかもしれない。

以前読んだ本に「離職率と見通し係数」の間の驚くべき相関が挙げられていたが、この「見通し係数」をいかにして上げるかが、学習意欲を上げるコツであると自分で昔何かに書いたことを思い出した。すっかり進学意識の高い生徒ばかりの進学校に行って忘れていたが、生徒は生徒、基本は同じなのかもしれない。

最初の「課題①」の時にも書いたが、これまでにも書く事によって頭の中が整理されることをしばしば経験してきたが、今回も思いがけず、この課題を書く過程で、最近悩んでいたことの答えのヒントが見つかるという経験を得た。「書く」ことは非常に有意義なことであることを今一度実感することとなった。

【疑問】

課題をたくさん出している進学校は現任校だけではない。多くの学校が課題を異常な量出していると聞く。課題の多さに嫌気がさし退学していく生徒がいる学校もあるそうだ。一日何時間勉強したかを記録して報告させる実践も多い。現任校ではスタディレコードといって週に１回集める。そしてとりあえず勉強時間が多い生徒を褒め、勉強時間が少ない生徒を叱るのが常だ。これも「量の評価」といっても良いのだろうか。私は大嫌いで、担任していても、いつも途中から全員提出は辞めてしまって、一部の女子生徒が何も言わなくても出してくるのでコメントしてあげていただけだった。